

「碍」の字表記問題再考（21）仏教にみる障害者像

『勝鬘經』は、第1章の「如来真實義功德章」から始まり、「十受章」「三大願章」「摂受正法章」「一乗章」「無辺聖諦章」「如来蔵章」「法身章」「空義隱覆真實章」「一諦章」「一依章」「顛倒真實章」「自性清淨蔵章」「如来真子章」「勝鬘章」の15章から成り立っている。その中、第12章の「顛倒真實章」に障害に関する記述がある。

今回はその障害の表記と内容について検証する。

顛倒真實章第十二

是滅諦過一切衆生心識所縁亦非一切阿羅漢辟支佛智慧境界
 辟如生盲不見衆色七日嬰兒不見日輪苦滅者亦復如是非一切
 凡夫心識所縁亦非二乗智慧境界凡夫識者二見顛倒一切阿羅
 漢辟支佛智者則是清淨遠見者凡夫欸五受陰我見妄想計着生
 二見是欸邊見所謂常見新見見識行无常是新見非正見見涅槃
 常是常見非正見妄想見故作如是見右身諸根分別思惟現法見
 壞欸有相續不見超欸斷見妄想見故欸心相續愚問不解不知刹
 那間意識境界超欸常見妄想見故此妄想見欸彼我者

（下線は筆者が強調）

（訳）

「苦の滅という聖なる真理は、はかりしれないものである。生き物の認識の対象であることを超越している。これはまた、阿羅漢と縁覚の知るところでもない。それはたとえば、生まれながらの盲人が、ものの姿を見ることができず、生まれて七日の赤子が、太陽を見ることができないようなものである。同様に、苦の滅という真理は、平凡な人の認識の対象に属さず、二乗の知るところではない。平凡な人の認識とは、二つの誤った見方である。すべての阿羅漢と縁覚の智慧は、平凡な人と比較すれば清浄なものである。偏狭な見方とは、五つの精神的・物質的な構成要素の中に実体的な自己が存在するという思い違いに、平凡な人が固執することである。それは、二つの「真理に相反する」見解の原因となる。

すなわち、常住主義と虚無主義である。もしも作られたものが無常であるとみなすならば、これは虚無主義であり、正しくない見解である。もしも涅槃が常住であるとみなすならば、これは常住主義であり、これも正しくない見解となる。思い違いによって、これらの見解が生じるのである。

「顛倒真實章第十二」は「誤った真理」について書かれた章である。下線で強調した「生盲不見」が視覚障害の人を表わす記述である。意味は上述のとおりである。なぜここに書かれているのであろうか？ インドでは寓話の中に視覚障害の人を登場させていることが少なくない。寓話とは、比喩によって日常生活に馴染みの深い出来事を語り、それによって人間に教訓を与えることを意図した物語をいう。特に動物や自然界の様々な現象などを題材にして、抽象的観念をわかりやすく論ずる内容の物語である。直接的に表現するのではなく、擬人化されている。『イソップ物語』などはその代表的なものである。この『勝鬘經』の喩えと似たものに、中国三国時代の呉の訳経僧・康僧会の『六度集經』というのがある。ここにも視覚障害の人を登場させている。

王曰「將去以象示之」臣奉王命引彼瞽人將之象所牽手示之中有持象足者持尾者持尾本者持腹者持脅者持背者持耳者持

頭者持牙者持鼻者瞽人於象所爭之紛紛各謂己真彼非使者牽
 還將詣王所王問之曰「汝曹見象乎」對言我曹俱見王曰「象
 何類乎」持足者對言「明王象如漆箒」持尾者言如掃帚持尾
 本者言如杖持腹者言如鼓持脅者言如壁持背者言如高机持
 耳者言如箠持頭者言如魁持牙者言如角持鼻者對言「明王
 象如大索」復於王前共訟言「大王象真如我言」鏡面王大笑
 之曰「瞽乎瞽乎爾猶不見佛經者矣」

（訳）

王は言った、「すぐに象の所へ連れて行ってやれ」、家臣が王の命を受け、この盲人達を象の元に連れて行き手を引いて、盲人に示した。中には、足を触る者、尾を持つ者、尾の根本を持つ者、腹を触る者、脇腹を触る者、背を触る者、耳を触る者、頭を触る者、牙を触る者、鼻を触る者がいた。盲人達は象について、各々の見解を争い、自分は正しく他の者は間違っていると収拾がつかなくなった。家臣は王のもとに連れて帰った。王は、「お前達は象を見たことがあるか」と聞いたが、見たことはないと答えた。王は「象とはどういうものだ」と聞いた。足を触った者は「大王様、象とは立派な柱のようなものです」と答えた、尾を持った者は箒のよう、尾の根本を持った者は杖のよう、腹を触った者は太鼓のよう、脇腹を触った者は壁のよう、背を触った者は背の高い机のよう、耳を触った者は団扇のよう、頭を触った者は何か大きなかたまり、牙を触った者は何か角のようなもの、鼻を触った者は「大王様、象とは太い綱のようなものです」と答えた。そして、王の前で「大王様、象とは私が言っているものです」と再び言い争いを始めた。鏡面王は大いにこれを笑って言った、「盲人達よ、お前達は、まだありがたい仏様の教えに接していない者のように、理解の幅が狭いのだね」。

ここでの瞽人が視覚障害の人を表わす言葉である。この寓話は有名なインド発祥の「群盲像を評す」である。「群盲像を評す」を辞書（『weblio 辞書』）で調べると「多くの盲人が象をなでて、自分の手に触れた部分だけで象について意見を言う意から凡人は大人物・大事業の一部しか理解できないというたとえ」と記述されている。「群盲」について、さらに調べてみると、「多数の盲人。多くの愚かな人々。」（『goo 辞書』）となっている。明らかに誤解を招く説明である。比喩であるとはいえ、上記のようにある特定の人たちを題材にして物語ることは、その深意よりも無意識のうちに偏見と差別的な意識を植え付けるのである。

人権の時代といわれる現代社会において、1981年の国際障害者年以降は障害のある人を登場させて比喩する話は差別的解釈を助長させるということから、見聞することは少ない。しかし、時として不快とされる「群盲像を評す」を用いて語り、社会的批判を浴びて謝罪する事例は少なからずある。

『勝鬘經』の中における障害の表記は筆者が確認した限りではここだけである。

[引用・参考文献]

四天王寺勤学院『現代語訳・勝鬘經義疏』四天王寺事務局、1976年。

森章司『仏教比喩例話辞典』東京堂出版、1987年。

中村元『現代語訳大乘仏典3「維摩経」「勝鬘經」』東京書籍、2003年。